

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと、風

第116号（2016年1月）

風に吹かれて（94）

白井啓治

・年の明けて吾が人生二万六千五百十日

新しいカレンダーに掛け替えると、歴史が一年積み上げられる。昨年一年は後世に伝え残されるものであったのかを考えると、あまり嬉しく、又は誇れるような出来事はなかったように思うが、その判断はもう少し後の人によって行われることになる。

今年の干支は「申」であるが、小生の六度目の干支でもある。七度目の干支までを考えると、迎えられるのかは大いに疑問である。そこでこんなことを思い付いた。今年からは、年齢を考えることは止めましょうと。代わりに日齢を数えようと。人生を日齢で考えることによって、日々をもっと大切に暮らすのではないかと思ったのである。

計画を持たず、自分の望むべき姿に向かって日々を大切に過ごす。望むべき姿には天井はないのだから、ゴールは命の枯れる時である。己のゴールがいつ来てもいいように、日々を精一杯の自由自在で暮らしを創る。だから言いたい事、思う事を斟酌なく言葉に出す、表現する。己の意の欲するところ則にたがわずを自認して暮らすには、日々を己の区切りとするのが一番であろうと考えた

のである。

さて、今年は当会報「ふるさと風」も10周年120号を迎える。やっとこひと昔を作ることができるとわくである。目出度きかなである。

10周年で120号を書き続けた、いや書き続けるだろう会員は打田さん、兼平さん、小林さんと小生の4名である。伊東さんは2号からの参加、菅原さんは19号から、木村さんは79号からの参加であるが、みなさん参加以来、休みなく毎月書いて頂いている。このことは大いに自慢していいことであろう。

内容や出来を問うのは愚。何よりも大事は、己の考えや思いを文という言葉に表現することである。打田兄曰く、自分の思いや考えを文章に表現するのは人間だけ。文章を書くのは苦手、嫌だというのは人間を放棄するに等しい、と。このご意見には小生も賛成である。

とかく他人の文章に愚かな尺度を当てて上手だの下手だの言う輩が多い。先ずは小中学校の国語の授業からしてそうである。情けなくなる。他人の文章を読むと、いや見るとであろう。どんぶりの隅をつついて愚かな尺度を当てて、評論めいたことを言う。これらは評論でも何でもない。

書いた文章の間違いを指摘されたら、これは有

難い事。一つ利口になるのだから。自分が己の思い・考えとして文章にまとめなければ間違つたまま過ごしてしまうのだから、指摘に感謝である。会員の皆によく話をするのであるが、どんぶりの隅をつついて、揚げ足取りをしても、書いたものを読んでくれたのだから、ありがたうである。物書き商売で一番困るのは、読んでくれないことと読んでも無反応の時である。まさに商売あがつたりである。

明けましておめでとうございます。 本年も宜しくお願いいたします。

ふるさと風の会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

小生の好きな頃に「出得するも不得せざるも渠も儂も自由なり 神頭は鬼面と共にならび 敗鬨も当に風流なり」がある。人はそれぞれ好きなことを勝手にやってもいいだろう。それによって時には失敗もあるだろう。しかし、その失敗はまさしく風流としての出来事でもあるのだ。このような意味であるが、己を何かに表現するという事は、風流を思いう事であり、それは文化力そのものでもあろう。そして文化力とは、ふるさとをヨイシヨする力そのものと言える。

暮れのことであった。ネットで起業意識調査のデータを目にしたら、日本人の起業意識は世界最低であった。以前に鶏頭となるも牛後となる勿れの言葉を書いたことがあったが、もうこの国の人には牛後になることしか考えないのだろうかとか心配になって来る。

就職に有利な大学に行つて、安定的な大企業に就職し、胡麻すりで一才だけ人より上に行き、出世が望めなければ上司の陰口を言い合つて、できるだけ仕事を増やさず人生を過ごそうとでもいうのだろうか。

与えられることしか考えられない人生なんて小生はゾツとするが、これを指して無気力世代とでもいうのだろうか。もつとも、こうした無気力は若い世代の責任ではなく、その上の世代の責任である。無責任世代が、無気力世代を育てたとと言えるのだろうか。

無気力という側面から世の中を眺めたとき、殺伐すぎる犯罪の多発は当然のことと言えるだろう。今年も申年で、悪いことは去るなんてことを言う人もいるが、嬉しいことが去るのかも。

申年の初めに

兼平智恵子

新しい年のお慶びを申し上げます
皆様にはお健やかに良きお年をお迎えの事と存じます。

旧年中は当「ふるさと風」に心寄せて頂き有難うございました。今年もどうぞ宜しくご愛読の程お願い致します。

幸多く 災害去る年に 智恵子

昨年の穏やかな羊の年は災害や事件が多く、中でも県内常総市での鬼怒川堤防決壊は衝撃的な出来事でした。そしてパリでの同時多発テロはまたしても世界中を震撼させました。

これからは人にも自然にも、どこにでも、起こりえる想定された事として、あらためて心する一年でございました。

今年の干支さるは「去る」に通じる事から古来より魔除け、厄除けなどのお守りとして親しまれてきました。皆様ご存じの日光東照宮の中で、陽明門と並んで有名なもので「見猿、言わ猿、聞か猿」の三猿像で「神厩舎」と言う建物の壁面に描かれているもので、実際には八面にそれぞれ別の猿の彫刻があり、八面で猿の一生、すなわち人間の一生を表現しているとのことで、この三猿像は、子供の時の「見ざる、言わざる、聞かざる」を表し幼少期には悪事を見ない、言わない、聞かない方がよいという道教の教えからであるともいわれています。

カリスマ性のある、負けん気の強い、ムキになりやすく、にくめない、ユーモアのあるお猿さん

に沢山の幸せと健康と明るい年になるよう欲をかりてしまします。

昨年は石岡小学校敷地内にあります石岡市民俗資料館が四月より石岡市ふるさと歴史館として新たに展示内容が変わりスタートしました。

二階が常設展示スペースで石器時代から縄文、弥生、古墳、飛鳥、奈良平安、中世、近世、近代までの主に出土品の展示。一階は企画展として二か月ごとの展示替えがあります。月曜日休館のほかは毎日の開館となっています。入場は無料です。昨年の企画展は四、五月が石岡の陣屋門展、六、

七月が土屋辰之助と石岡の看板建築展、八、九、十月は石岡のお宝展、十一、十二月茨城廃寺速報展。県内外からの団体での見学が多く、そして石岡市内の皆さんのお越しも多くなりました。心強く感じました。

先人たちの懸命に生きた証を伝えるため、そして、歴史のある街なのに、石岡の皆さんに尋ねても分からないとの答えが多いとの言葉を頂きます。どうぞ石岡の皆さん、今年こそ、よく見て、よく聞いて、そして皆さんに伝えましょう。私もよく見、よく聞いて、しっかりと書き、そして声はりあげてご案内し、石岡市街地の歴史スポットそして八郷地区の自然の美しい里山ととれたてのフルーツをご紹介したいと思います。

21世紀に失望(1)

菅原茂美

新年早々に「失望」などと、ネガティブな物言い筆とる失礼を、許されたし。

ユネスコの憲章前文に『戦争は人の心の中で生

まれるものであるから、人の心の中に、平和の砦を築かなければならない。』とある。しかし、1933年から45年までの間に、旧ソ連とナチス・ドイツは、現在のポーランド、バルト三国、ベラルーシ、ウクライナなどにおいて何と1400万人の一般市民などを殺害したという。この数字は、中国の言う南京事件の誇大宣伝とは全く違い、姓名・年齢など記録が残っているもので、真実に近いものだという。虐殺の手法はガス室のみならず、銃殺や計画的飢餓とあるから地獄絵図そのもの。アウシュビッツの件は、その一部に過ぎない。人間とは、そこまで「鬼」に徹するものなのか。

さて極楽トンボの私は、15年前、強い期待感を持って21世紀の幕開けを待った。さぞかし輝かしく、希望にあふれる夜明けと信じていた。人類が長年夢見た新世界が華々しく展開。人類を苦しめた諸問題は一瞬に吹き飛び、明るい日差しが全地球を照らすに相違ない。この時代に生きた事を、全人類が喜び合う幕開け…と信じていた。

そんな気持ちで迎えた21世紀なのに、まだわずか15年しか経っていないとはいえず、夢と現実は大違い。前世紀の大虐殺事件とあまり変わらない無残な事件が世界の至る所に勃発している。煎じつめて考えれば「人類の愚かさ」という事になるのである。聖人のどんな教えがあるが、賢人のどんな言葉があるが、利己的な遺伝子に支配される「オレさえよければそれでよい」とする世界風潮は、一向に消えそうにもない。個人も国家も己の欲望丸出し。醜い事この上もなし。「人間の性(さが)」と言ってしまえばそれまでだが…。それが「生き物の本性」なのであろうか。

小賢しい物云いではあるが、メソポタミヤに農

耕定住してから今日まで一万二千年の文明らしき経験を積んでも、所詮は人類も単なる野生の動物。限りなく本能に支配され続ける未熟な動物。

21世紀を迎えても何一つ好転しない諸々を列挙し、人類は改めて、崇高な生き方を模索すべきと考へ、新年早々ではあるが、犬の遠吠えを列挙。

*

①テロの横行

人類史の殆どは、テロの繰り返し。政治目的を果たすため、暴力に訴えてそれを実行する。お家騒動・下剋上・国とり合戦・世界大戦…。なぜに人類はこのような蛮行を重ねて繰り返すのか。

人類は、長年の狩猟採集の遊走生活から、定住農耕生活が始まると、おのずから食糧の蓄えなど、貧富の差が生じる。重労働に耐えた者が報われず、権力者に富が集まるようになると、その不平等さに「テロ」は生じたものと思われる。

それが日本の縄文人は、定住生活を始めても、狩猟採集生活を続け、農耕は行わなかった。獲物は分け合って、運命共同体は懸命に生き延びた。男も女もそれぞれの分担を果たし、長老を中心に、統制がとれていた。争う事はめつたにない。

化石や埋葬骨の歯石や骨の分析から、その時代の人が、何を食べていたかが分かるという。更に4000体にも上る縄文人骨に、戦いによる骨の傷痕などは見つからないという。しかし、今から、2500年ほど前、農耕を携え、大陸からこの列島に一挙に押し寄せてきた弥生人骨には、戦いによる無数の傷跡が存在する。縄文人にはないが、弥生人骨には結核によるカリエス痕も存在する。先住民を吸収混血した後の列島住民の明け暮れは、神話時代から今日まで、醜い戦いの歴史である。

平安初期、平穩に暮らしていた東北の蝦夷を征討して出世した坂上田村麻呂將軍など、正に歴史上の汚点である。

列島では縄文人の血を引く先住民は温厚であったが、大陸の戦争難民であった弥生人により、血で血を洗う好戦的な野蠻人に変更してしまった。まるで大陸での敗者復活戦を演じているようである。そのような子孫が明治・大正・昭和と幾度もテロを繰り返して、愚かな世界大戦へと突っ走る。

1936年の2・26事件。齋藤実・高橋是清等が殺害されたクーデター。32年の5・15事件では犬養首相射殺事件など。近くはオーム真理教による地下鉄サリン事件など、数えきれない。

今、地上最大の病理はイスラム国(IS)。パリの同時テロで一般市民など130人も殺害した。彼等はソフトターゲットを狙ってきた。確かに劇場や商店街は警備が手薄であろう。手の込んだ自爆テロなど真に防ぎ難い。ISは2014年5月設立を宣言して以来一年半で3591人を殺害したと犯行声明。今回パリでの襲撃事件はISの本拠地シリアを空爆しているフランスのオランダ政権に対する報復であるが、なんの罪もない一般市民を多数巻き添えにするなど、許されない事だ。

そして旧イラクにおいて、大量破壊兵器を隠し持っているとの疑いから、米国が先頭に立ってイラク攻撃を行い、多くの一般市民を巻き込み、フセイン政権を打倒し徹底的に破壊した。しかし肝心の大量破壊兵器は見つからなかった。ここにイスラム教徒の中から過激な分子が報復を企てる。現にIS指導部の基本は旧フセイン政権の軍将校などによる集団指導体制との事。経済制裁を受けていたフセインイラクの資金源は、石油の密売で

あつたが、現在のISも、米財務省推計によれば石油密売で毎月50億円。その他「徴税」で年に数百億円。人質身代金が55億円。海外からの寄付金が60億円。更にIS支配地域に住む元警官や兵士は「誤った政権に仕えた事に対する反省の証書」として、身分証明書が30万円。その更新料が、毎年2万5千円との事。何としてもその資金源を絶たない事には、テロは収まらない。

長年キリスト教の先進国が、発展途上のアラブ・中東等のイスラム系の国を蹂躪してきた経緯がある。積もる恨みが一気に爆発というか、報復に転じた。特に紀元前、世界に散ったイスラエル王国の末裔がユダヤ人として1948年、中東に戻り、イスラエル国家を建設した。土地を奪われたパレスチナ人は、恨み骨髄に達する。

そこでフランススコ・ローマ法王が腰を上げる。世界を回り、和解と協調を唱える。「神の名が暴力や憎悪の正当化に利用される事があってはならない」と。平和ほど尊いものはない。イスラム教国の最高指導者だろうが、人民により選出された大統領だろうが、平和が何より大切な事は分かり切っている話である。原点に返って、何とか全世界が協調歩調を進めてほしい。

また「難民問題」は緊急の課題である。EU(欧州連合)加盟国(28)同士は、域内移動の自由が旗印。国境を自由に行き来できるため、イスラム過激派が難民になり済まし侵入しテロを企てる。今回はギリシャに比較的安易に入り込み、フランスへと侵入したらしい。それを防ぐため、EUがトルコに資金援助して、巨大な難民施設を建設するという。EUも空爆だけではなく、恒久的な難民対策が必要である。

② 国連の無力

世界各国が己の「国益」第一で、勝手に領土を拡大したり、不平等貿易や、難民の押し付け合いをしたりしている。力のある国が自分の都合で、他国の資源を、探索・搬出したりしている。これらは弱小軍備の国では防衛しきれない。こんな不合理を許してはいけない。こんな時こそ国連が乗り出して仲裁を図り、公明正大な裁定を下すべきである。国連は力の強い者の言いなりになるなど、言語道断である。中国が対日戦勝70年記念の軍事パレードをやったら、国連事務総長のパンギムンは、このこ出かけて観閲し、拍手を送っている。公平さを無視した論外の愚行である。

EUは、欧州共同体などが主体となり外交・安全保障・司法・通貨などの政治統合を進めるため1993年組織化された。年々加盟国数は増えている。しかし近隣国との摩擦は一向に減らない。特にロシアとEUは多くの問題を抱え、時により、一触即発の危険性を孕んでいる。

そこで私の考えであるが、「国連」を、もっと強化できないものか。何者も抵抗できない、絶対的な権威を持った強力組織に改編できないものか。そうすれば弱小国が、苦しい経済状況なのに軍備を強化するなどの「愚」を繰り返さなくて済む。

私が駐在した中米のある国は、国営の発電所が予算不足から燃料が十分買えず、しょっちゅう停電ばかり。然し空には米軍払い下げの戦闘機が毎日ブンブン飛んでいた。中古の武器を売って、潤っている国があるなど、腑に落ちない話である。

それゆえ、国連以外はどんな国も一切の軍備を持つてはいけない事とする。勿論全世界の核兵器

*

など即刻全てを廃絶すべきである。2015年版年鑑によれば、現在全世界の「核弾頭保有数」は、9か国で、15・853発である。これらは、直ちに平和利用の資源へと加工改変すべきである。国連強化の方法だが、一人の独裁者支配など、絶対にはできないシステムを作り上げなければならぬ。何が何でも「集団指導」で行うべきである。どんな弱小国代表であろうと、大国の代表と全く同等の決裁権限を持たせる。

そして理想は、全世界に国境の撤廃。宇宙から見たら、国境線などナンセンスである。渡り鳥から見たら、国境線など『それなくに?』と嗤われる。人知は鳥の自由の足元にも及ばない。回遊魚だって、国ごとの支配水域等ナンセンスである。人類も小異を捨て、鳥や魚並の真の自由を獲得し、この世に生まれた喜びを謳歌したらよい。

そこで、人種差別を防ぐため、結婚はハイブリットの強力推進を提言したい。強制は人権を侵害するからいけないが、できるなら全世界が混血すれば融和は促進される。宗教も階級も貧富差も、更に言語の違いも、一挙に解決される。たわいのない初夢と嗤われるかもしれないが、世界平和のためなら、努力するに値する試みと言える。

*

③ 安易な文明の利器

ビルの林立。地下街や交通網の過剰発展。人権を軽視した成果主義の経済重点主義。愚かな軍事力の強化。更に便利過ぎる文明の利器などは、人の精神と肉体の弱体化を招く。か弱い人類で満ち溢れ、荒(すき)みきった山野が残るだけ。

私はいつも思うのであるが、日本列島は地震列島である。なのに地下深く交通網や商店街が増え

続けている。想定外では済まされない超巨大地震があったら、それらがメチャクチャに壊れはしないのか。ゼネコンが儲かればそれでよいのか。まして海抜ゼロメートル地帯では、想像を超える津波の襲来があったら、必ず地下街は水浸しになるに違いない。現在の人知で絶対安全などあり得ない。便利なら何でもよいと考えるのは軽率過ぎる。地球表面は、厚いマグマの上に薄く乗ってる地殻である。マグマの熱対流の前には、あまりにも儂い存在である事を忘れてはならない。百年に一度千年に一度でも、過去にあった巨大な地震・津波・噴火などは、必ず再発する。ケチな考えで、備えを怠ってはならない。更に地球温暖化で海面上昇やゲリラ豪雨など現に身近に迫っている。

さて、確かに自動車は便利である。自動車なしの生活など今更考えられない。しかも今日、世界の各メーカーは、完全自動運転の自動車の開発に鎊を削っている。しかし、自動運転自動車のITシステムにハッカーが侵入してきたら、どうやってそれを制御するのか？ 高度なシステムには、必ず高度な技術を持った悪者が妨害に入る。サイバーテロをいかにして防ぐか。そのセキュリティが、完璧でなければ、とても怖くて乗れない。

どこまで人間は機械に頼り、臨機応変の判断を捨て、安易な手段を手に入れようとするのか？

今更、馬車に戻れとは言わないが、あまりにも文明の利器に頼り過ぎると、思考力の衰えた脆弱な社会に落ち込んでいく。それゆえ文明進化のスピードは、もつと緩やかに進むべきものと私は考える。機械化文明が猛スピードで突っ走るのは、人類の滅亡を早めるだけではないのか？

今日、地球上空は人工衛星やその打ち上げロケ

ットの破片で充滿しているという。高がビー玉ほどの小破片でも、銃弾よりも速い速度で飛びまわっているの、肝心の宇宙船に衝突してくれば大事故になりかねない。まして中国は人工衛星の打ち落とし実験まで実施している。もはや今日は、気象衛星や電波通信の人工衛星は不可欠である。しかしその重大な機器の周辺を、無数の弾丸が飛びまわっているようでは、丸腰でテロリストの前に立ちまわらなければならない。国際秩序で、しっかりした宇宙倫理を貫かなければならない。それゆえ、まずは宇宙ゴミの掃除が先で、それから便利な衛星を打ちあげたら良い。身辺整理の確立が先と思うが、いかがなものであろうか。

衛生面では、周りの病原菌を殺したいのは分かるが、常在菌や有用菌まで一網打尽で殺菌されてしまう。界面活性剤の便利さは分かるが、人間の根本的な抵抗力の減少は、種としての活力をそぐ事になる。世界は抵抗力の弱いフニャフニャの、か弱い人類で満ち、滅亡へと誘う事になりかねない。700万年かけて今日の知性を獲得した人類が、高々100年くらいの機械文明進化により、何もかも台無しにされる。機械におんぶに抱っこ、の世相とはあまりにも情けない。そしてあと30年後には機械による失業職種は猛烈に増えるだろう。

DDT・PCBなど、内分泌攪乱物質は、生体に性ホルモンと類似の作用をもたらす恐るべき環境ホルモンである。生活に便利だからと言って、これらを乱用すれば、人類の生き残りに大きな禍根を残す。商業主義に毒されてはいけない。ほどよい環境汚染は人類の抵抗力維持に欠かせない。

テレビやスマホの安易な情報が世に充滿。薬までネット通販とは世も末。全ての薬は基本的には

肝臓の毒。個人の体質・体調や生活習慣により、薬剤師の厳格な判断により投与すべきもの。老夫婦の薬の貸し借りなど、もつてのほかである。

さてメディアから、深層に迫る情報を得るには、何といつても新聞や関係雑誌などである。更に、年鑑や年報、白書やイミダスなど、具体的な専門情報は、一層、深層を探る重要なツールである。浅田次郎日本ペンクラブ会長は、『活字を読まなくなると人間は思考をしなくなる。日本は識字率が高く、教養を重視する「知の基盤」があったからこそ、明治維新以降、急激に成長し戦後の復興も成し遂げた』と言っている。

一億総白痴化とよく言われるが、テレビのバラエティ番組などナンセンス極まりないものが世に溢れすぎている。これらは何としても放送界から減少させ、教養番組を増やしていくべきである。知的好奇心の旺盛な成長期の児童生徒を、あんな低俗番組に毒されてはいけない。

日本は現在、物造りなど世界の最高技術を駆使し、優れた製品で、世界から称賛されているが、次世代がナンセンス世界に浸っていると、すぐに後進国に抜かれてしまう。数学に強いインドなどにもすぐ追い越されてしまう。どんなに自由主義の国とはいえ、政府はある程度の縛りかけないと、惨めな未来が押し寄せてくる。

— 続く —

地域に眠る埋もれた歴史 (10) 木村 進

あけましておめでとーございます。

この風の会は今年10年を迎えますが、私はまだ

会報に記事を載せて3年3か月しかたっておりません。全体の3分の1です。諸先輩の方を見習いながらも少しまともな記事が書けるようになりたいものだと思います。まあこれからも地域おこしの散策を続けていきたいと思います。

真壁地区(4)

○ 村井醸造

真壁の旧武家屋敷近くに「村井醸造」という酒造会社があった。大震災の影響なのかあちこちまだ修理をしている最中であつた。

古い建物や屋根の損害を直すのは大変であろう。入口には「こうめい(公明)」「花だより」と書かれた酒樽が置かれていた。

公明はこの酒造会社の主力銘柄なのだそう。樽の上に掲げられた説明には「日野における商人(近江商人)活躍の記録としては、江戸時代初期明暦(1655-1659)の頃の記録が最も古い。関東や奥州の各地へ上方商品を運ぶため間もなく関東にその中継所として拠点地を構えるようになった。」

「江戸時代の初期である延宝年間(1673-1680)に、常陸の国真壁の町へ村井重助が醤油味噌販売の店を構えた。これが日野商人における関東出店の最も古い記録である。」と書かれている。この会社の印によると、中の見学もできるとなっています。また奥に見える大きな煙突は「昔、蔵中で使う熱湯を沸かしていたそうです。現在は使われておりませんが、当時の面影そのままに残っておりま

でも、昔醤油などを作っていた時からあつたのなら大豆のカスなどを燃やすのに使つたのではないかとも思います。ただ、この煙突は昭和初期のものだと思いますので湯を沸かしていただけなのかもしれません。長い塀が続く大きな酒造所です。

説明にあつたように、この近江商人の村井重助は最近まで代々名前を継いで来たそうです。

現在で17代目だそうです。名前は区別して少し変わったようです。今の戸籍では親と同じ名前は基本的には認められなくなっている(でしょう)

また日野という地名は今の滋賀県浦生郡日野町のことで、この日野家も長い間、滋賀県日野に本宅があつたようです。しかし昭和19年から真壁に移り住んだそうですが、日野にも家があるようです。古くから多くの商人が活躍した近江商人がこの真壁の街の商売屋さんの元になっていること、表れだと思えます。

○ 旧真壁郵便局

真壁の昔の陣屋跡周辺にはたくさん登録文化財に指定された建物が存在する。

全部で100棟以上建物が国の登録文化財に指定されている。これは県下でも大変多い地域である。これからいくつかを紹介していきたいと思えます。まずは、「旧真壁郵便局」です。この旧郵便局はただ1つ洋風な建物としてシンボリックな存在となっています。

この建物は昭和2年の建築で、石岡の町並みに残されている看板建築(昭和5、6年)と同じギリシヤ風の建物です。

建築された当時は第五十銀行(常陽銀行の前進)真

壁支店であつた。

郵便局として使われていたのは昭和31年、昭和61年まで。(ただし、現地の説明では昭和29年頃にこの場所に移転したとなっている)

内部には郵便局の窓口カウンターを残し、観光パンフレットが置かれ、街中の観光の出发点や中継所として活用されている。

また奥の部屋には観光客用にトイレが設置されています。内部は全て板床張り、装飾的なものはあまりない。質素なテーブルと椅子がいくつか置かれていたが、地元サークルや観光客の休憩などに利用されているようだ。

2階に上がってみると比較的小さな部屋が2つと少し大きな広間が1つ。「真壁郵便局のはじまり」と書かれた説明書が置かれていました。その下は明治11年の郵便取扱役の任命書と明治14年の郵便はがきの宛名(東京の消印)。左側は「真壁郵便局の為替印(明治23年4月30日)とその裏面の振出日付印」

さて、昭和はじめの石岡の街中にもこのような建物はたくさんありました。第五十銀行は香丸通りの橋本呉服屋さんの近くにありました。きつとこのような建物だったのでしよう。レンガ造りの洒落た「川崎第百銀行」(三菱)も少し若宮八幡宮の通りを入ったところにありました。こちらは原や佐倉に旧三菱銀行の建造物として同じような建物が残っています。

では石岡の郵便局は今の「まちかど情報センター」の隣「関東つくば銀行」あたりにありました。この場所は石岡の道路元標が置かれており、街の中心でした。明治8年に石岡警察署があり、その後郵便局が入って昭和46年に関東銀行が入って

います。郵便局の歴史は、やはり真壁と同じ明治5年に「石岡郵便取扱所」としてスタートしています。何故今は何も残っていないのでしょうか。

○ 陣屋と街並み

真壁の街並みは江戸時代の笠間藩の陣屋時代から明治・大正・昭和に続く長い時代にわたっての街並みがかなり残っています。

国の登録文化財に指定されている建造物も100以上もある。これらは現地でもパンフレットも整備され、じっくり訪れてみるのも楽しいだろう。

あまり詳しくは紹介することもできないが、一回り回ってみた建物などを少しだけ紹介しておこう。

・猪瀬家住宅：猪瀬家は佐竹氏家臣であった

・猪瀬家住宅の医薬門（江戸末期～明治初期）

・塚本家住宅：土蔵造り 見世蔵（大正中期、住宅（大正13年）、土蔵（明治41年）、門（明治40年）

・根本医院：江戸末期の高麗門

・土生都家：明治時代の高麗門

・「旅籠ふるかわ」数年前に、古い建物を利用して宿泊施設として整備し開業した。

・川島書店の見世蔵：江戸末期のもの。開業時は生薬屋、その後荒物屋などを経て4代前から書店。

・根本米店さん（昭和13年）

・入江家住宅（大正15年）

・小田部生花店Ⅱ木村家住宅 見世蔵、主屋、門ともに江戸時代（嘉永6年（1825）またはそれ以前。江戸時代中期から油屋を営んでいたが、明治になり郵便局（真壁郵便取扱所）をはじめ、代々局長を務めた。

・塚本茶舗の脇蔵（明治中期） 建設当時は飯塚家

（呉服屋）の建てた文庫蔵

・潮田家住宅（見世蔵、袖蔵、脇蔵、離れ…すべて明治初期（後期）この潮田家は、江戸時代から呉服商で大きくくなった豪商であった。今はたばこ店を営んでいる。

・高久家住宅（店舗・明治期） 16代前に関西から移り住んだという。また先代まで肥料商を営んでいた。

・星野家表門：明治初期の建築で明治35年頃に移築された。地元では諸川屋さんという乾物屋さん。江戸時代にこの地で笠間藩の御用商人をしていたそうです。

真壁は石の街と呼ばれてきました。

陣屋周りにも石材所もあるのですが、少し街中から離れたところにたくさん石材所があります。そんなものを訪ね歩いて楽しいように思います。

○ 密弘寺

真壁の陣屋街の中心にある古刹「密弘寺（みつこうじ）」です。正式名称は「真言宗熊野山密弘寺」別名「名水不動」と呼ばれています。宝治元年（1247）に開山したと伝えられています。

この境内からきれいな水が湧きだして「名水不動」と呼ばれ、この町の清酒造りに利用されてきたとされます。

門をはいつてまず右手に古い子安観音などの像がおかれ、右端に「十九夜尊」の碑が置かれています。

この反対の右端は「二十三夜尊」の石碑がありました。十九夜は月待ち信仰でもまだ時間が早いので女性の集まりや講が中心だと思います。

不動堂の手前に同じような小さな堂宇が置か

れていました。「金毘羅大権現」と書かれています。不動堂：天保8年に火災でこの堂宇が焼失し、天保11年（1840）に再建されたもの。この建物も国の登録文化財に指定されています

○ 峠道

さてこの真壁と石岡をつなぐ山越えの道の話です。

石岡と真壁を結ぶ峠道は「上曾峠」と「湯袋峠」の2本の道があります。

奈良・平安の時代にはどうやら石岡（常陸国府）と結ぶ道は十三塚の手前から杉線香やゆりの郷方面から山越えする「湯袋峠」道だったそうです。

しかし、今は県道7号線が通る柿岡から真つすぐに上曾峠を越えていく道が主流になった。

真壁氏の居城、墓などもこの道に近い。

真壁から江戸に荷物を運ぶのはどのようにしたのだろうか？

真壁の街に來ての説明にはあまりはつきりしたことは書かれていない。しかし、陸で運ぶよりも水運の方がかなり発達していたことを考えると、多くの荷がこの峠を越えて柿岡まで馬で運び、そこから恋瀬川を通過して霞ヶ浦、利根川を経由して江戸に運んだのではないかと想像している。

県道7号線を石岡市柿岡の宿場を過ぎ、西に向かうと、筑波山から加波山に連なる山並みが迫ってくる。そして、筑波山は山の影に見えるようになる。上曾の宿場で足尾山などにもこちら側から登ったようだ。

まっすぐ山道を登ると上曾峠手前で峰寺山西光院への道を左手に別れ、峠に到着するとすぐに真壁の街に下っていく。しばらく山道を下り、家が

見え始めたところに、「水分神」と「馬頭尊」の大きな石碑が置かれていた。

まあ馬頭尊はこの他にも近くにも昔のものもあつたので、やはり馬に荷を積んで馬子が手綱をひいてこの峠道を柿岡まで運んだのだろう。

何故、峠の頂上より大分下った場所に「分水嶺」のような「水分神」というものが置かれているのだろう。

この近くで水の流れが変わっているのだろうか？ 川も確かにあつたがここで流れが変わるようには見えない。

真壁も石岡側に近い所だけしか訪れていない。しかし小栗なども散策するときと全然別な景色が広がってくるに相違ない。いつか続きの散策記事が書けると良いと思う。

○ まとめ

真壁の街は中世には真壁氏の城があつたが、江戸時代になったとき真壁氏は秋田角館に移つた。そしてしばらくの間は幕府の直轄領として領主はいなかった。

豊臣 5 奉行の筆頭であつた浅野長政(ねねの妹が長政の妻)は関ヶ原では徳川方で功績を残し、和歌山 37 万石をもらつたがこれを息子に譲つて隠居の身になって江戸にいた。

それを家康がこの真壁 5 万石が空いているといふのでこれを、長政に譲り、1606年に真壁藩 5 万石が誕生した。まあこの真壁は長政にとつては隠居料でもらつたものだが、この地を愛で1611年に65歳で亡くなつた。墓は「伝正寺」にある。

の登録文化財を有する街となっている。

ちりぬるを

伊東弓子

今年も、あと十日で終わろうとしている。一月、初観音の集いの席で、若住職から羊年の話を聞いたのは、つい何日か前のような気がする。娘は今年五度目の羊年を迎えた。私にもそんな日があつた。四十八歳の時だつた。

年の始めに、

「あ！ 私の辰年。今年は確りやるわ」

と出発、そして年の瀬が近づくにつけ、淋しさを感じた。

「五十歳代には辰年はこない。今度辰年を迎えるのは、六十代の始めになる」

と、とても気にしていた日を思い出す。あれからもう一代過ぎてしまったことをしみじみ思うこの頃だ。今年目に止まった草木の声を耳にし、その姿を目にし、私の人生をも重ねて「ちりぬるを」の深く、重く、そして優しい心を、身をもって感じた年だつた。

高崎部落の八坂神社の夏祭りのことだつた。高崎村時代からの祭りで、社は村の中心辺り高崎台を背にして建ち、参道の右側には田があつた。その田の初穂を社に奉つたと聞いた。古くは左側にも田があつたと聞く。境内の草刈り、輿を出し掃き掃除する。(輿は今あちこち痛んでいるが、六十年前は盛大に祇園まつりで活躍したものだ)神主の後に集まって御祓いをして戴き、お神酒をいただいた。その後祝の膳に集う(祝の膳もその時々

の人の都合、思わくで変わってきたことになる。部落の人が若いも若きも交流する席となった。

「あの木も切った方がいいだろう」

と区長が言い出した。

「切るって、なんで」

「邪魔だよ。あの辺りの草刈りが出来ないよ」

「水草が茂ってもいつときで、枯れちゃうわよ」

「邪魔にはならないよ」

あの木は堤防のできる時残った木だった。昔の姿は知らないで、知ろうともしないで、関係ない物、別に必要な物と決めつけてしまう考えだ。

「水際になんで生えてんだ」

など言っている。私は反対の意見を言った。反対・賛成で話をしているのは四〜五人で、あとの人は口を開かない。自己防衛の為の賢さか、狡さか、恐れからか部落ではよく見られる光景だ。一応よく考えようという事で話は終わった。

私はいたたまれずその後、川中子から八木に至る水辺を歩いて確かめてみた。

「何処でも堤防を造る時切ったよ」

「堤防の内側に水路を造るのに邪魔で切ったよ」

と高崎、大井戸の人が話してくれた。

「個人の土地にある柳をついこの前切ってたけど、田だつて荒れ放題で邪魔になる訳でもないのに」

と平山の人は言う。高崎の女の人は、水辺の柳の姿や当時のことを詳しく話してくれた。園部川、恋瀬川、羽成子新川それぞれ豊かに生えている。山王川は両脇コンクリートで固められたまさに水路だから生える余地もない。堤防の内側には殆どなく人工的に育てた高崎、下石川地区には水草、柳がある。柳は猫柳で糸柳は一本もなかった。下

高崎に残った五本の柳も葉を落とし始めた。この木のある風景を風情として、高崎の先人の生きてきた一つの証として捉えられないものなのだろうか。もし切るなんて声が出たら、下高崎全戸を署名して歩く積りだ。声を出せない柳の木に代わって「殺さないで」と言っておけるから：ね。

南京に行く途中の町だったか、伸び放題の糸柳の並木を通った。夏の暑さを防ぐ為だと聞いたような気がする。今はどうしたか。あれはあれで幸せか。

隣の借家に枝を伸ばしていた大きな檜の木があった。十年前の事、その若夫婦が「木の葉が落ちて仕様がな。切つて欲しい」と山の持ち主に話した後、あつという間に小さく一本の大杭のようになつてしまった。細い枝が出て葉も出ていたが、ぐんぐん伸びている様子は全くない。犬の散歩の時、小枝の枯葉を手にしてみたら、この木の葉ではなく、絡んでいた蔓草だった。とうとうこの木は再生する力も尽きてしまったのだろう。山持の奥さんが、

「この木を見ると痛々しくて涙が零れます」

と言っていた。借家にいた若夫婦は隣り地区に家を建てたが、そこも立ち退いて何処かへ移つたらしい。人の持つ傲慢さを見せつけられた。後は野となれ山となれ。そういう人の気持ちからこの木の生命は絶たれてしまった。

町を行くと街路樹がある。その哀れな姿は何処にでも見られるが、この町の文化の低さのバロメーターと思つてみている。伸び過ぎて電線のために道路の為に切られている。根本の方を見ると伸びたく堅いコンクリートまで持ち上げている。でも人間は助けてくれないよ。切られても好きな様

に伸びな。人間にはめられた柵を壊して伸びていきな！

文化センターの檜の木も大きくなった。幹が太くなって小さなコンクリートの柵を盛り上げている。事務所に行つて小さな柵を一回り外してやつては：と進めたが変わつてはいない。当時の予算で作られた物は取り外しもだめなのかな。

晩秋の道路を走っている時、車の中から見た。大部太めの木、葉が風に舞っていた。夕映えの中に美しい。手品師が黄金色の紙の舞を指先で弾き出しているようだった。でもそれは片腕だった。フェンスから出てしまった腕は若葉も緑色もましてや黄金色もつけることはなかっただろう。黄金色の舞の美しさとは裏腹に痛ましい格好だ。来年また頑張つてね。

我家の南角に楓がある。前に住んでいた人が植えたのだから、三十五年以上になるだろう。近くの雪柳も枯れ、日陰になつた白と桃の花もつけなくなった椿も、三〜四年の中に歩道が出来るので、別れの日が来るだろう。色褪せた葉が地面を埋めつくした。やがて土になるだろう。そこに次の世代が芽を出すからね。

沖洲の宮路さんの作品に「樹々」という題名のものがあつた。古代の戦乱の後、焼かれた大地から新しい生命が伸び上がってくる様子のものであつた。繰り返され、繰り返されてきた生命の営みだ。これからも良しという人、悪いからやめろという人、黙っている人、無関心な人達が、人間中心に生きていくことだろう。でも大自然は、すべてを包み込んでくれる大きな力だと思つている。

若い時、お坊さんの話を聞いて感動した日があつた。(いろはにほへとちりぬるを わかよたれそ

つねならむ うみのおくやまけふこえて あさき
ゆめみしゑひもせず」の歌から始まって、作者の
こと、時代のこと、いろはうたことなどの話のあ
と「ちりぬるを」のところの詳しい話になった。

「ここですよ。ただ散ってしまっただけ。という意
味ではなく、散っていた花や葉は大地の土となっ
ていくのです。やがて大地からは新しい生命が芽
を出してくるのです」

といった内容のお話でした。「を」という字に中
にそんな深い意味の含まれている日本語の素晴ら
しさを知ったあの日だった。

自然界は無駄にすることなく、すべてを次の世
代のために「ちりぬるを」。自然界の一部であるはずの人間はどうだろうか。私はどうだろうか。

平沢官衙遺跡

小林幸恵

明けましておめでとうございます。今年もふる
さと風の会・ことば座宜しくお願いいたします。

先月号でつくば市の平沢官衙遺跡について、少
しだけ紹介しましたが、調べなおしたので改
めて遺跡について紹介したいと思います。

平沢官衙遺跡は、今から千年以上前の奈良・平
安時代の筑波郡の役所跡です。昭和50年の調査
で重要な遺跡であることが判明し、昭和55年に
国の史跡に指定されました。

平成5年、6年に復元整備事業を計画し、本格
的な調査が行われました。調査では一般の遺跡で
はみられない大型の高床式倉庫と考えられる建物

が数多く並び、それらを大きな溝が囲む、遺跡の
全容が確認されました。これらの倉庫跡は、当時
の税であった稲や麻布などを納めた、郡役所の正
倉跡と考えられています。出土物はわずかで、土
器類、瓦、硯の破片、炭化米などが発見されてい
ます。

○高床土壁塗双倉（ならびくろ）

史跡のほぼ中央にある最上級の建物の高床土壁
塗双倉は、床面積¹²⁵㎡を超す大型倉庫である。
復元に際し、法隆寺網封蔵を参考に土壁と茅葺
にされている。

○高床校舎

古代の文献により、校木を井桁状に組み上げる
校舎は、郡衙正倉では中規模以下の倉に多いこ
とが判明している。また、校倉は柱がないため
軒先が下がりやすいため、ここでは、外周柱穴
列を屋根支柱と推定して、校舎で復元している。
屋根は、校倉建物に多い寄棟としてある。復元
に際しては、東大寺や唐招提寺に現存する奈良
時代の校舎を参考にしている。

○高床板倉

発掘調査で発見される掘立柱建物は、一柱穴一
柱が普通なのだが、この建物では、側柱穴に二
本の柱痕跡が見つかった。これは一本は床上ま
で伸びて桁・梁を支える通柱、もう一本は床を
支える添束（柱）を考えられるため、柱の間に
板壁を落とし込む板倉で復元された。屋根は軒
の出が短い切妻になっている。古代の文献では、
郡衙正倉はこの板倉が最も多くなっている。

○大溝跡

遺跡全体を取り囲むように大型の溝跡が掘られ
ていた。確認された長さは、西溝110m、北溝150
mだが遺跡の外側で確認された段差も東溝と推
定すると長さは200mを超えている。断面は概ね
上幅4m、下幅1.8m、深さ1.2mの逆台形とな
っている。

高床式の建築物が「高床土壁塗双倉」で、大型
倉庫だそうです。梯子を登ると眺めのいい景色で
のどかな田園風景でした。

秋にはオカリナコンサートを行ったそうですが、
イベント会場としても最高の場所だと思いました。

【風の談話室】

あつという間に一年が過ぎ、また新しい一年が始
まった。

今年も、当会報の創刊10周年を迎える。毎月欠か
さず発行し続けるのは大変なことであつたが、振
り返ると10年とはあつという間に過ぎたともい
える。

小さな会報ではあるが、会の全員が欠かさず毎月
何かをかいてきたことは、自慢できることであらう。
当月会報を含めてあつという発行すれば120冊となる。
120冊を編集し終えたら、大声で言わなければと思
っている。

「見上げたもんだよ屋根家の禪」と。

陸平を「ヨシヨシする会の田島様より」猿真似の断舎

利難し年新たな年賀状が届いた。環境が変わられて、まだ落ち着かぬところでしたが、またの投稿を心待ちにしております。

京都の今井様から新年の投稿をいただきました。今年一年も継続しての投稿お願い申し上げます。

《読者投稿》

私の国府巡り もじもじ文字

京都府精華町 今井 直

我が町のカトリック教会にカナダからやって来た神父がつぶやいた。「日本語ノ会話、ボチボチ。セヤケド、読ミ書キ、サツパリ、アキマヘン」(神父の関西弁はバツチリだ) 英語はアルファベット26文字だが、日本語は約2倍ある仮名文字に加え、無数の漢字を使う。小学校六年間に学ぶ教育漢字は、1006字あるそうだ。日常生活で使用される常用漢字が1945字。いや、文字数だけではない。平仮名と片仮名を使い分け、漢字には音読みと訓読みがある。筆順まで習得するとなると複雑極まりない。しかも地名・人名や植物の名前などは、日本人ですら読めないものもある。

我が国で文字文化が芽生えたのは、4世紀末の古墳時代である。朝鮮半島の百濟(くだら)から王仁(わに)という賢人が、『千字文』と『論語』を携えて渡来し、漢字と儒教を伝えたと記紀に記されている。仁徳天皇の治世の繁栄を願って、王仁が詠んだとされるのが、「難波津」の歌である。

難波津に 咲くやこの花 冬ごもり

今は春べと 咲くやこの花

万人に親しまれ、誰でも知っている歌といえは、

難波津の歌だった。百人一首に含まれていないが、現在でも競技かるたでは、序歌として最初に朗詠されるのが通例となっている。

平安時代に編さんされた『古今和歌集』仮名序に、「安積山」の歌と並んで「歌の父母のやうにてぞ、手習ふ人のはじめにもしける」と、紀貫之が記している。「安積山」の歌は、

安積香山 影さへ見ゆる 山の井の

浅き心を 我が思はなくに

当時はまだ紙が希少品だったため、手習いは長さ30cm・幅4cmほどの木簡に、和歌などを墨書していた。土器や瓦も練習用に使われ、難波宮跡など全国で数多く出土している。教養を身につけるには、たいへんな努力を要したのである。

「奈迹波ツル□久夜己能波□」(なにはつに□くやこのは□) (□は判読不能)。聖武天皇の紫香樂(しがらき)宮跡とされる宮町遺跡(滋賀県甲賀市信楽町)で、見つかった歌木簡だ。一言に一字をあてる万葉仮名で書かれていた。赤外線撮影で、裏面にも「阿佐可夜□」(あさかや□)の文字が読み取れ、古く奈良時代から、難波津と安積山の歌は、ペアであったことがわかり、大きな話題を呼んだ。

都だけでなく、阿波国の国庁址とされる観音寺遺跡(徳島市国府町)でも、難波津の歌の木簡が出土している。「天離かる鄙(あまきかるひな)」(都から遙か彼方の田舎)で、青雲の志を抱き勉学に励んでいたのは、どんな若者だったのだろうか? 徳島の国分寺や観音寺は、弘法大師ゆかりの八十八カ所霊場の札所であり、菅笠・白衣姿のお遍路さんで賑わう。最寄の駅はJR徳島線の府中駅だが、

「府中」は「こう」と読み、難読駅名のひとつだ。国府の所在地に残る地名だが、江戸時代、「府中」は「不忠」を連想するからよくない、「孝」にせよと藩主が命じたとか。

つい先頃、京都市内でも歌木簡が見つかった。出土したのは、平安京の朱雀大路に沿った一等地である。難波津の歌のほぼ全文が記された木簡の発見は初めてで、平安時代前期のものという。万葉仮名が進化して仮名文字が使われ始めた時期だ。この木簡には、漢字を崩した草仮名が用いられ、現代の平仮名にかなり近い。万葉仮名から平仮名への移行を証明する貴重な資料といえる。世相を表す「今年の漢字」で、2015年は「安」が選ばれた。清水寺貫主が揮毫した「安」が、「あ」に見えた人も多かつたろう。平仮名のルーツを改めて思いださせる「今年の漢字」報道だった。

昔から、紫香樂宮には観音様がおられるという噂がある。宮址は小高い山に囲まれ、水田がひろがる盆地だ。朝堂殿があつた辺りの畦道に立ち、南西の方角に目をやると、正面の山が美しい観音様の寝姿に見えるのだ。枕してお休みになっている穏やかな横顔・ふくよかな胸がシルエツトで拝め、聖武天皇も朝な夕なに癒されたことだろう。阿蘇山の遠景は釈迦の涅槃像に似ているが、紫香樂の観音様はもつとリアルに見える。

宮址の南側に、大正時代末に「紫香樂宮址」として国史跡に指定された遺跡がある。今なお三百三十個ほどの礎石が残っている。後の調査で礎石の配置から、東大寺式伽藍の寺院跡だと判明した。大仏造立のために建立した甲賀寺(こうかでら)か、または近江国分寺として改修された寺院とする説が有力である。宮町遺跡に近いから、紫香樂宮の

一部である可能性もあり、未だ「史跡紫香樂宮址」としての指定は取り消されていない。

移転の理由は定かでないが、第2次国分寺として「瀬田廃寺」がある。紫香樂宮址の約15km西北西の大津市にあり、名神高速道路の瀬田西ICに近い。北側に「史跡近江国庁跡」の傍に位置し、近江国分寺址の有力な推定地だ。高速道路建設により金堂跡など大部分が削り取られ、高速の道路端に塔跡の礎石を5個残すのみ。平城京から長岡京に遷都した頃に焼失し、瀬田川対岸の国昌寺（こくしょうじ）が、第3次国分寺としての機能をもつことになった。

国昌寺址は大津市国分にあり、古代の国分寺は地名で残っている。現在は市立晴嵐小学校で、校庭の片隅にひっそりと『史蹟近江國分寺址』の碑が建つ。他には礎石も説明板も何もない。石岡小学校と同様に、校庭の地下に史跡が眠っているのかもしれない。碑の右面に「昭和十一年三月建之」、後ろに「滋賀縣」と、力強い文字だ。不思議なのは、『國分寺』の「分」の下半分が、「刀」でなく「力」となっており、初めて見る漢字だ。「滋賀縣」が間違える筈もなく、意図的に書かれたのだろうか？

昔、旧国鉄が赤字に苦しみ、「鉄」は金を失うと書鉄から縁起が悪い。「失」を「矢」に変え「国」としたが、結局は民営化された。英語の略称「NR (Japanese National Railways)」は、国有でなくなったため、JRに。たちまち黒字に転化し「銭、有る」とは、ある落語家の爆笑ネタだった。もしかするとこれかもしれない。寺院で刀を振り回すのはけしからぬこと、すそ広がり「八」の下で仏の「力」にすぎることを願った……ではない

だろうか？ 私の妄想である。とうとう、明確な説明をしてくれる人に出会えなかった。

変体字といえ「慶應義塾大學」という大学名。6文字のうち、画数が少ないのは「大」だけだ。書くのに面倒だからと、「義塾」・「學」を削除……それでも「慶」15画・「應」17画と、画数が非常に多い。そこである慶應ボーイが、「尸」(またれ)の中に、それぞれKとOを書き入れ、簡略化したらしい。究極の国字(和製漢字)である。(当然、パソコンはこんな文字に対応していないので、読者で暇のある方は、紙に書いて試して下さい)ワープロで入力できる、いわば市民権を得た国字もある。「風」(なき)、「榊」(さかき)、「籽」(こ)、「雫」(しずく)、「鯉」(ひらめ)、「躰」(しっけ)、「袴」(かみしも)など多数ある。

余談ながら、漢和辞典をひくと、「慶」「應」はともに部首は、「尸」ではなく「心」に属する。「恐・恋・惑・恥・慈・愛・悲」など、部首「心」は感情・意志など心の動きに関する文字だからである。

こんな話をいつか、あのカナダ人神父にしてみよう。赤鼻の神父は親しみを込めて言うだろう。「阿呆トチャウカ？」

養生日記

堀江実穂

「老いていく」

子供の頃の私、鏡が大好きだった。

姿鏡に写る自分を見て

「何てかわいい女の子」

大好きなピンクのワンピースを着て長くのばした髪をおさげにする。

満足の顔をつくりくりと回ってみせる。塾の帰りのことだった。

工事をしているおじさんに声をかけられる。

「お嬢ちゃん可愛いね。おさげが似合ってるよ」

私は褒められて得意顔をつくり

「ありがとう。いつも褒めてくれて」

と挨拶をする。

この時には、今の姿を予想することはできなかった。

あれから三十年が過ぎた姿が今鏡の中にいる。

目は窪んで、皺だらけの顔。髪は薄くなり白髪

の混じった老けた顔。胸よりも腹が出ている体。

無残な姿が居た。

老いていくというのは醜くなっていくことなの

だろうか。

「泣き虫」

初めての一人暮らし。

これまで自分の周りにはいつも大勢の人がいた。

家族がいた。

独身だった時も、両親、おばあちゃん、明るい

姉と弟が一緒にいた。

結婚した。

大家族だった。子供も三人生まれた。

賑やかという幸せは当たり前にあると思っ

た。

一人暮らしを思ったことも、考えたこともな

かった。

離婚して一人暮らしになった。

家には会話する相手はいない。

一人でテレビを見て、一人で食事をして、冷たい布団に一人で寝る。人恋しい。

秋になって冬になって一層人が恋しくなる。涙が出るほど淋しい。

人が恋しい。

枕を濡らしながら思った。

生まれてくるときは一人。死ぬ時も一人。

だから普段は大勢の人と一緒に居たいのだと。

一人の涙は寂しすぎる。

大勢での笑いの涙がいい。

すっかり定期投稿者になっていたいただきました堀江さん。今年も続けての投稿宜しくお願いいたします。

ときどき当会報は文芸紙が聞かれるようになりましたが、広い意味での志文紙です、とお答えするようになっている。何でも紙雑紙です、とお答えしてもいいのですが、ちよつと気取つて言つてしまふ。

ふるさと風の会そのものは、ふるさとの歴史文化の再発見と創造を考へる、を掲げていますが、文章にして何でも物言ひを思ひださつと思つてしまふ。まぶしく雑紙です。

《ことば座だよ》

聾語と手話舞について

白井啓治

当会報「ふるさと風」が、今年創刊10周年を迎えるのであるが、手話舞劇を主軸にした劇団こと

ば座も今年で10周年を迎える。6月の定期公演では、何か節目になるような演目をと考えているが、まだ固まっていない。

昨年暮れ近くであった。風の会の木村さんのブログに、小生の主張する「聾語」について紹介されていた。節目の新年でもあるので、これまでここに書いて来たものと重複するが、手話舞と聾語、手話舞の構築について改めて記してみたい。

ことば座の演じている朗読手話舞とは、朗読を主旋律にして、手話を舞いにして表現するというもので、このふるさとに誕生した新しい舞台表現である。

朗読を主旋律にした舞の表現という発想は、小生が以前より持っていた発想であったが、聾者の小林幸枝と出会い、彼女の手話での会話を見たとき、これは「舞になる」と直感し、創出したものである。小林には、出会うや即、内弟子として指導をはじめ、舞台表現としての手話舞の構築を進めたのであった

小生、彼女に会うまでは、手話に関する認識もほとんどなく、聴覚障害者のための手話表現文字程度にしか思っていなかったものであった。しかし、彼女と対話をしていて、小生の認識している日本語を手指によって構成するものとは全く別のものであることを知ったのであった。

一般には、文字や声の「あいうえお…」を手指の形に変換すると認識しているが、これは聾者のための手指文字ではなく、どちらかと言えば健聴者のための手指文字といえる。聾者のことを分かってやるための手段として作られた手話言語なのである。勿論手話には単語としての手話があり、これらの単語としての手話は地域によって異なる

ものがある。

この程度の認識であった小生には、小林の使う手話と動作表現には大層なカルチャーショックを与えるものであった。

その実態を知るうちに、小生の直感した「これは舞になる」の正体が見えてきたのであった。

小林の使う手話がなぜ小生に舞と映ったのか。それは健聴者の側から考えたら理解の届くはずのものではなかった。小林の手話表現に舞を直感した正体は生まれつきの聾者の人たちにとっては日常の当然なる表現なのである。そして、その表現は、我々がどこかに置き忘れてきた心の表現方法の大事な一つでもあったのだ。

そうした考えや思いが重なって、手話言語ではなく聾言語＝聾語の存在に気付いたのであった。

聾者の人達には、言語学的には確立されていませんが、もともと聾語というべきものがあつた。ここで言う聾語とは、言語学に言う伝統的手話とは少し異なる。

伊藤政雄氏は「日本手話の言語的構造」で次の様に述べている。『手話には「話しことば優先手話」と「イメージ優先手話」とがあり、前者は、ことばが優先して「手話が後から追いかけていく」のに対し、後者は「自分なりのイメージを手話で表す」イメージから話しことばに関係なく手話が出てくる』と。このイメージ優先手話がここで言う聾語の概念に近い。小生の主張する聾語も伊藤氏の言うイメージ優先手話も健聴者の人達には認識・理解が難しいものである。

しかし、この聾語あるいはイメージ優先手話の表現を聾者の独特の知恵と才能として理解すると、

その言語としての動作表現は、優れた舞や舞踏と言え、舞台芸術としての新たな方向を導いてくれると言える。

小林幸枝の手話舞は、個々人の感性としての聾語・イメージ優先手話をベースに日本語対応手話を融合した「舞い」あるいは「舞踏」として表現している。この表現形式を小生「朗読手話舞」と名付け、呼んでいる。

朗読手話舞の構築について：

言葉には、「意味を把握する言葉」と「味わう言葉」の二つの側面がある。また見方を変えると同じ言葉であっても「やせた言葉の使い方」と「豊かな言葉の使い方」がある。

やせた言葉の使い方とは、単純な説明言葉であり、豊かな言葉とは文化的表現言葉とすることが出来る。

ことば座の行っている「朗読手話舞」は、味わう言葉・豊かな言葉を愉しむ、翻訳芸術表現ということが出来る。

朝日新聞のコラムの中に小林秀雄の翻訳について書かれていたことがあったが、朗読手話舞とはまさにこのコラムに紹介された翻訳話に類する。ランボオの詩文の中に、コンマをはさんで「季節（セゾン）」「城（シャトー）」という言葉が二つ「OH（オウ）」という溜息と共にならんでいる。

普通ならば「ああ季節、ああ城」と訳すところであるが、小林秀雄は、「季節（とき）は流れる、城（おしろ）が見える」と訳した、と。

朗読手話舞の構築課程はまさしくこの翻訳文学の創作といえる。

台本として「万葉集」とその現代語訳を小林幸

枝に渡す。小林は小生の渡した現代語訳を読んで、手話通訳（意味を伝える）ではなく聾語あるいはイメージ手話で心の動作表現としての翻訳を試みる。その聾語・イメージ手話に翻訳された動作の言葉を見て、それを再び万葉集の原文に翻訳し直して朗読する。これが朗読手話舞構築のプロセスである。

もう少し、解りやすく朗読手話舞の構築を説明すると、だれもの知るシャヤンソン「愛の賛歌」を手話舞で表現を創るとしましょう。

♪あなたの燃える手で私を抱きしめて、……は岩谷時子訳でほとんどの人がその歌詞で覚えている。しかし、原文は少し違う。美輪明宏訳の、

♪高く青い空と 落ちてきたとしても、……が原文に近いものである。仮に、小林に原文に近い美輪明宏の訳を渡して聾語で舞表現を構築してもらおう。それで、歌い手はお馴染みの岩谷時子訳で歌う。二つの言語が、語る意味は些か違うが底に流れる真実としての心模様はより鮮明に描き出される。これこそが朗読手話舞に表現しようとするもので、新しい舞台表現と言える。

このようにして構築された朗読手話舞について、ことば座の設立当初から応援いただいている吉野公喜氏（元東日本国際大学学長||教育学者・障害児教育・聴覚障害・知識・情報等著書多数）よりこのような言葉を頂いた。

『朗読手話舞の公演は、いつも楽しく心豊かな時間と空間にすぎなくていい。感激このうえない。朗読手話舞にみる音声言語と手話のもつ世界（手話言語）とのコラボレーションは、意味深い言語学的哲理を秘めている。言語表現における表層と深層の構造的成り立ちを否応なく意識させて

くれる』

東京立川での公演の時である。イベントハウスのオナーが、手話パフォーマンスから、小林さんつてネイティブな聾者ですかと聞かれたそうである。ネイティブな聾者とは、一寸妙な気がしたが、彼女は小学校の頃に耳が聞えなくなったそうで、彼女曰くは、生まれながらに音を知らない人の手話は途中から手話が日常語になった自分達とは表現の仕方がちがいで、ものすごく綺麗な手話表現をする、との事であった。

小生は、聾者の方との接点は小林幸枝が最初だったので、後天的な聴覚障害者との表現の違いなどに関しては、あまり深く考えることはなかった。

しかし、小林の手話の表現が、小生の知る手話表現とは随分違っていた事は直ぐに分かった。

彼女の手話をもっと大きくすれば舞になり、舞台上掛けられると直感したのであった。

舞台スケール感・舞台映える所作・動作は生まれついで、個人としての才能で、訓練をしたからと言って一流のレベルに到達することは難しいものと言える。

手話の話に戻すが、小生その手話パフォーマンスとは直接話す機会はなかったのであるが、どうやら音の概念を知っている後天的聾者と音の概念の持っていない先天的聾者との手話表現には大きな違いがあるようである。

聾語あるいはイメージ手話による表現は、多少とも音の概念を持つ後天的聴覚障害者には、動作言語としての流動性、インスピレーション性の問題で、使うのが難しいようである。

確かに小林の使う手話には、視覚と皮膚感覚だ

けで表現する独特の手話が沢山出てくる。それを称して手話パフォーマー女史などはネイティブ手話と呼んでいる様である。

そして、ネイティブ手話と呼んでいる聾語、或いはイメージ手話は自然に同化した風や流れを持った表現をつくりだしていると言える。

小林の手話表現が風や流れをもつことについて、日本語になった縄文語の研究者である鈴木健氏はその著書にこのようなことを言われている。

『ユキは、アイヌ語 i || (それを) uk (取る、受ける) i (もの)。雨と異なり雪は手で受け取ることが出来るから、i:ki → yuki. 雪か。これは筆者の妄想である。と書いてしまったが、そうでもなさそう。最近出版された土屋秀宇「日本語(ち)と(じ)の謎」(光文社)に、「雪」の字のヨの部分

はもともと中央線が右に突き出ている、手のひらと腕を横にした様子を表していた。手のひらにふわりと乗る雨という事で、雪という漢字が生れた。とある。また当地の手話舞姫も「つくばねに雪かもふらる:」(万葉集)の箇所と同じく手のひらに雪を受け止める仕草をしてくれたのが印象に残っている』と書かれてある。

小林の表現する聾語は、漢字の成り立ちに全く同じであった。

雪の手話は、親指と人差し指で輪をつくった両手を左右上から揺らしながら下ろしてくる表現をする。これで「雪」或いは「雪が降る」を示す。

しかし、小林の手話にはちらちら舞い落ちる雪とそれを手で受け取る仕草が入る。そしてそれは雪が降る様子を示す動作よりも、雪を見上げて手の平で受ける動作表現の方に重きが置かれている。人間の進化の過程を見ると、音声言語よりも動

作言語(手話の下になった言語)の方が遙かに古い。実際に人間が音声でコミュニケーションが取れるようになったのは、二足歩行を始めてからずーっと後のことになる。二足歩行する事で声帯が下がり複雑音を出せるようになってからのことなので、複雑音を出せなかった頃にはジェスチャーである動作言語がコミュニケーション言語であったと言える。

この様に人類史から見ると、漢字の成り立ちが、全く音の世界を知らない聾語(イメージ手話)の中に数多くみられても不思議はない。

このように考えていくと、現代の日本語対応手話に対してネイティブ手話という区分けも正確なのかもしれない。

小林の手話舞に対して、これまで学問的な考察を持ったことがなかったのであるが、手話舞の広がり考えたとき、もう少し学問的な考察を積み上げた方がいいのかも知れない。

朗読手話舞創出10周年の今年、さらなる広がりをもった手話舞に仕上げたいと思っているが、年々に動作や思考が緩慢になってくることを自覚すると、些かの焦りも感じてしまうこの頃ではある。

《風の吹き・風の嘯き》

インフルエンザ余話

菅原茂美

昔、イタリアで冬になると咳や高熱で多数の人が死ぬ。占星術が盛んだったので、冬に現れる星座の影響と考え、イタリア語の「影響」インフル

エンツア」が、英語ではインフルエンザになったと、ものの本に書いてある。

1918〜9年のスペイン風邪は、恐らく人類史上最大の感染症だったと思われる。全世界で、ほぼ5千万人が死亡した。日本でも48万人が死亡した。当時の世界人口19億人なので、6億人が感染して5千万人が死亡したという。現代人口にそのまま換算すると、72億人の中、22億人が感染し、1億8千万人が死亡する事になる。

なぜ「スペインかぜ」といわれたか?それは当時第一次世界大戦の最中。戦争関係国は互いに風邪流行の発表などしない。戦争に直接関係しないスペインで、大発生を発表したからだ。アメリカでの被害は大変なものであった。アメリカは大陸横断鉄道建設のため、中国人が多数働きに来ていた。実はその中国人がアメリカに強力な風邪を持ちこんだと言われる。中国は庭先に豚を放し飼い。豚は川に水を飲みに行く。川や沼には渡り鳥がインフルエンザウイルスをまき散らしている。それがブタに感染し、豚は人にまた感染させる。鳥や豚にはそれほどダメージではなくとも人間には甚大な被害を及ぼす。動物種を渡り歩く間にウイルスは突然変異で病原性を増す。アラスカの永久凍土にスペイン風邪で亡くなった人の遺体が埋められており、1997年にその遺体から、スペイン風邪病原体の鳥インフルエンザウイルスが検出された。インフルエンザは怖い。まず予防注射を!

十八人の刺客たち

打田昇三

偶然とは不思議なもので、此の原稿を書いてか

ら適当にテレビのチャンネルを回したところ「櫻

田門外の変」のドラマを放映していた。新年号に

書く内容では無いと思うが年末のテレビに登場す

る「忠臣蔵」と似た様な事件なので大目に見て頂

きたい。万延元年（一八六〇）三月三日、現在の

警視庁近辺だと思いが折から降りしきる雪の中で、

登城する幕府の大老（非常時に置かれた幕府の最

高職）彦根藩主・井伊掃部頭（かもんのかみ）直

弼が水戸脱藩浪士らに襲撃された事件である。

私の祖父は商人になるつもりで越後屋（現在の

「三越」）に奉公していて、使いに行く途中で惨劇

直後の現場を見てしまったから、是からは商売ど

ころでは無い！と方向転換をして職人になった。

此の事件は有名であるが襲撃に参加した十八名の

消息については余り知られて居ない。

何十年も前だが、私は職務上で「斎藤さん」と

言う謹厳実直な本庁の事務官と折衝することが多

かった。「真面目なお方だ」と感心をして個人的

に知っていた本庁の上司に其の話をしたところ、

其の上司は「…彼（斎藤さん）は斎藤監物の孫か

曾孫だよ」と教えてくれた。斎藤監物は事件に

関わった水戸浪士の中心的人物である。

井伊掃部頭が襲撃された原因は異国に対する開

国を天皇の許可を得ずに行かない、それに反対する

志士たちを弾圧したからであるが当時の孝明天皇

は極端な外国嫌いで世界情勢などは全く理解せず

とても許可は下りないから幕府（井伊大老）が専

断で開国をしたらしい。しかし結果的に天皇を無

視したことになり勤皇の志士を怒らせた。それに

加えて次の將軍を誰にするか！で水戸藩は井伊直

弼と対立していたから、脱藩した過激な連中がテ

ロ行動に走ったのである。事件の経過は省くが斎

藤監物ら十八名の消息は次の様なことらしい。

稲田重蔵

斬り死

山口辰之助

自殺

鯉淵要人

自殺

広岡子之次郎

自殺

有村次左衛門（薩摩藩士）

自殺

佐野竹之助 老中役宅へ自訴

取り調べ中死亡

斎藤監物

右に同じ

黒澤忠三郎

右に同じ

森 五六郎

死罪

蓮田市五郎

右に同じ

大関和七郎

右に同じ

森山繁之助

右に同じ

杉山弥一郎

右に同じ

関 鉄之助

各地逃走後、水戸で死罪

岡部三十郎

各地逃走後、江戸で死罪

広木松之助

各地逃走後、鎌倉で自害

増子金八

江戸潜伏後、郷里・石塚に潜む

海嶽巖助

明治十六年、六十歳で病没

各地潜伏三年、家に戻り菊地剛

三と名を変えて警視庁に奉職、

晩年は故郷で天寿を全うした。

明治三十六年、病氣のことを聞

いた明治天皇から従六位を贈位

され、五月十九日、家にて死亡

同じ行動をとっても捕えられたりした者と、生

存者とは待遇が大きく違ってくる。一概には言

えないが、世の中、しぶとく生き抜いた者が勝ち

のようである。それにしても水戸藩は惜しむべき

人材を無為に失ってしまった。

野菜が体に良いわけ

菅原茂美

果物や野菜を多く食べると、体によいと言われ

る。その訳は、これらに含まれる「抗酸化物質（ビ

タミンCなど）」が、カタラーゼの形に変換し、D

NAを傷つけるフリーラジカル（活性酸素など）

を中和するからである。活性酸素などはDNAに

取りついて遺伝子を傷つけ、細胞をガン化する。

喫煙は活性酸素の増加を促し、ガン化の他にビタ

ミンCを破壊し、シミ・くすみの原因ともなる。

ビタミンCは原始人類の主食はイチジクなどで

あったので、自然界から存分に摂取できるため、

普通の動物の様に体内で合成しなくても済んだ。

人と一部のサル類とモルモットだけがビタミンC

を体内合成できないので、人の場合、1日あたり

100mg摂取が必要と言われる。それが不足すれ

ば壊血病を起こし、貧血や歯肉・筋鞘・骨膜など

からの出血がみられる。

所が最近の研究では、厳密に評価すると、抗酸

化物質は直接病気を防いだり進行を抑えたりする

事はできない。実は植物は何億年もかけて、害虫

に食われるのを防ぐため、害虫に対する弱い神経

毒（苦い物質）を合成し、身を守っているが、そ

れを人が食べると、細胞に弱いストレスを与え、

それに耐えると更に強いストレスに耐えるように

なり、結果として耐病性を増す。それゆえフリー

ラジカルが作用して、脳に蓄積するベータアミロ

イドにより大きなストレスを受けるアルツハイマ

ー病は、普通の野菜や果物を摂取し、日頃低濃度

の神経毒に曝されると、より強いストレスに

合っても強い抵抗性を得る事を意味し、パーキン

ソン病、癩癩(てんかん)、ハンチントン病などに
対しても対応策の道が開けつつあるとの事である。

桓武平氏の幻影

打田昇三

徳川幕府第七代将軍・家継の時代(一七一三～
一七一六)に、前橋藩(十二万余石、酒井家)に
仕える村上権兵衛と名乗る武士が鹿島神宮へ参拝
したついでに石岡を訪ねて来た。当時の石岡は府
中と言ひ水戸の支藩で二万石、家門・連枝と呼ば
れる家格で藩主は江戸詰め、参勤交代を行わない。
領地のある府中と守山(福島県)には陣屋を構え
ていたが行政の中心は江戸であつたと思われる。

村上姓は源氏系か大掾氏系が主流とは思ふのだ
が：村上権兵衛は大掾氏の支流を称していたから
自分の祖先(平国香)の墓を訪ねて常陸国府が置
かれたとする府中の町へやって来たのであるが、
平国香の時代からは九百年ほど経過しており、何
よりも平国香は常陸国の大掾職(監察職務)であ
つたから国府に常駐していた訳では無くて時々、
顔を出していた程度だと思われる上に、甥の平将
門と争つて自殺したのが筑波山登山口に近い桜川
右岸の台地・東石田であるから、どう考えても石
岡に墓が置かれる訳が無いのである。

当然ながら権兵衛さんが何処を探しても其れら
しきものは見当たらず、町の人に聞いても平家の
ことなど知らない人ばかりであつた。戦国時代末
期、天正十八年に佐竹に攻められ府中城で滅亡し
た大掾氏は純然たる平家系であるから其の関わり
で何かを伝える者が居ても良い筈なのだが：是は
無理もないことで平国香の時代からは七百余年、

大掾氏滅亡からでも百年は経過している。

其れで無くても将軍家・徳川氏は源氏系を称し
ていたから、平家系の家柄でも公然と主張するこ
とは憚つていたのであろうから「平家所縁の墓」
も知られてはいない。是を知つた権兵衛さんは大
いに憤慨したのだが、其れを見かねた府中の町の
親切な人が「そう言えば、富田町の平福寺に大き
な石塔が在るから、もしかするとあれが平家に関
わりがあるかも知れない」と教えたと思われる。

言われたとおりに平福寺を訪れた村上権兵衛は
其の寺院の正面に在る墓域に、滅亡した大掾氏の
墓を見つけ中央に立つ大きな墓標を見て、其れが
遠祖・平国香のものと思ひ込んでしまった。都合
の良いことに、伝えられる平福寺の創建年代が、
平将門事件の発端(平国香の死亡年代)と一致す
るのである。村上権兵衛は満足して前橋へ帰つて
行つたと思われるが、石岡としては先祖思ひの権
兵衛さんを騙したことになる。

新年から、打田兄、菅原兄の所為量的な執筆には驚
かされる。

暮れに、打田兄より次作の「将門記」の私訳の構想
文を渡された。平家物語の完成に間を置かず、次は
「将門記」に挑戦するのである。

個人的には、平家物語よりも将門記に興味を持つ
のであるが、原文をちよつと見ると、その挑戦エネ
ルギーは、平家物語の比ではないだろう。

全く頭が下がります。
冒頭の文ではないが「見上げたものだよ屋根家の
禪」である。

会の長老である打田兄、菅原兄の執筆意欲には、た
だただ敬服である。

【特別企画】

打田昇三の私本・平家物語

巻第四(一、一)

今は何事も形式にとらわれない時代なので文章も
自分の思うままに自由に書けるけれども、誰が決め
たのか「文章の書き方の基準」のようなものが横行
していた時代があつて、特に公文書の場合には「起・
承・転・結」「いつ、何処で、誰が、何を、どうして、
どうなった」と、学校の先生に腕白坊主が怒られて
いるような文章を書くように喧(やかま)しく指導さ
れていたものである。その頃に、起承転結の見本の
ように教材に出されていたのが「大坂本町、糸屋の
娘、姉は二十一、妹は二十(はたち、諸国大名弓矢で
殺す。糸屋の娘は目で殺す：」と言う妖しくも物騒
な俗謡であり、作者は有名な歴史家だと言われてい
た。

此の原稿も、少しずつ話が進展するので「ふるさ
と」風「主宰の白井啓治さんがタイトルを「勝手に
書く：」から「私本平家物語」に格上げしてくれ
た。糸屋の娘ならぬ糸屑程度の作品で恐縮するのだ
が「目で殺す」とまではないかなくても、お読み頂く
方々に「目を背けられない」ように努力して書きた
いと決意を新たにしている。

元々、文字が無かつた日本では朝鮮半島経由で中
国の漢字が、それも「経文」として入ってきたのが
最初であるから、歴史的には嘘八百を並べた「古事
記」でも「日本書紀」でも、或いは時代がぐつと下
つて平家・源氏に始まり、北条、足利から武田、上
杉、毛利、織田、豊臣、徳川のことを書いた「日本

外史」でも漢文で書かれている。

其の例からすれば「朝廷・公卿の世界、武士の世界」に展開された平家物語こそ漢文で書かれるべき性質の物語なのであると思うが、内容を見ても分かるように仏教関係者が物語の成立に深く関わっているから「和漢混淆文」になる要素も多かったであろうし、是が漢文で書かれていては容易に読んで貰えなかったと思う。難点としては仏教用語が多用されていることであるが、幼稚な神話で騙して築かれた天皇制絶対の社会が定着していた時代に、当時は地位も不安定であった武士階層の平氏が宗教界、政界、更には皇室まで支配して日本のトップに君臨することが出来たのは単なる好運だけでは無く、仏縁に依るものだと思えないことも無いから我慢するしかない。

ところが「盛者必衰」の原理から、さしも繁栄を極めた平家一門が或る時期を境にして衰亡の道を進むことになる。それも突然に沈没するのでは無く、巨大な氷山が少しずつ融けるように屋台骨がキシミ出して遂には滅亡する。極言すれば「平家物語」は誰にでも当て嵌まる「因果応報」を説くには最適で劇的な題材であったろう。何よりも実在した歴史の貴重な記録なので、皆さんにはぜひ知っておいて頂きたい物語である。

是までに書いた巻一から巻三までは、平清盛と後白河法皇を中心とした勢力との心理的な対立場面が多かったから退屈な内容であったけれども、巻四からは「糸屋の娘」並みに弓矢での戦いの場面が増えて来る。平家の立場からは気の毒とは思いますが、是まで何事も優位で「栄耀栄華」の道を進んで来た平家は、平清盛が自分の孫である安徳天皇を保育園にも幼稚園にも入れないで、いきなり強引に皇位に就け

ようとした辺りから一転して「滅亡への道」を進むことになるのである。素人の理屈で言えば、やはり幼児期の教育や義務教育はキチンと受けさせなければ。特に一国の天皇となる坊やであれば尚更のことである。

このシリーズ（十四）の最後にも述べたが、治承元年に平家の親戚でもある大納言・藤原成親ら後白河法皇の近臣たちが「平家打倒」の陰謀を計画して失敗に終わってからは、平清盛と後白河法皇との関係が二重三重に拗（こじ）れてしまった。双方ともに妥協とか寛容とか言う言葉を知らない人物であるから何かが起きなければ収まらない。取り敢えずは武力で勝る清盛が法皇を抑えていたけれども、一人の満足は万人の不満で成り立つ。

かつてフランスでワンマンとして知られた某大統領が、自分の孫に「将来の希望」を聞いたところ「僕も（お爺ちゃんのように）大統領になりたい！」と胸を張って答えた。是を聞いた爺ちゃんは慌てて「…大統領は一人で良いのだ！」と不機嫌になった話が伝えられる。自分が天下に君臨する者は常に自分の足元が脅（おびやか）されるような不安が有るのか、平清盛も油断のならない後白河法皇を鳥羽殿に幽閉してしまった。

法皇も清盛に負けない「策士」であるから清盛が警戒するのにも分るが、その頃の日本人は（今でもそういう精神構造の人は多いが）出来の悪い童話程度の天孫降臨神話に洗脳されていた。本来は日本列島に侵入してきた大陸系民族の支配者・大和朝廷を神様の子孫だと思っている。そのボスである後白河法皇を逮捕し鳥羽殿に押し込めてしまったのであるから、清盛の勇氣と決断を称える意見も有ったと思うが、頭から「平清盛は非国民！」とする第二次大戦時代

のような偏った意見が多くなるのも仕方無いことではある。

厳島御幸（いつくしまこう）のこと

治承四年（一一八〇）正月一日、後白河法皇は平清盛によって鳥羽殿に幽閉されたままである。

「殿」というから施設としては良く出来ていたと思うけれども、折角の正月でも自由に外出が出来ないのは辛い。法皇も清盛を恐れて「特別休暇」の申請を出したいところを我慢していた。正月三日の間、法皇の許に年始に来る勇氣の有る者は居らず誠に淋しい限りであった。そうした中で、今は亡き少納言入道信西（藤原通憲）学者、後白河法皇の近臣、妻が法皇の乳母、平治の乱で敵に殺害されたの息子である桜町中納言こと藤原重教と、其の弟の左京大夫・藤原長教の二人だけが訪ねて来た。原本に「許されて参られ」とあるから、清盛の許可は貰って来たのであろう。

正月二十日には東宮（皇太子）言仁（ことひと）親王の「袴着（はかまぎ）三歳の祝」並びに「俎始め（まなはじめ）乳幼児に始めて魚肉を食べさせる」など目出度い行事が行われたが、全ては清盛の指図であったから、本来は主催者であるべき言仁親王の祖父・後白河法皇は俗に言う「蚊帳の外」に置かれていた。宮中の決まりでは、是らの行事は本人が三歳になった時に実施すべきことで有ったのだが、翌月には平家の都合で皇位に即ける（安徳天皇として）予定が有ったので、言仁親王が一年二か月の時に忙しく行われたのである。

組織の長でも大会社の社長でも本人が意識不明の重体になれば自動的に任務を解かれ、後継者を決め

て仕事が肅々と行われるのが普通なのだが、日本では近代でも昭和天皇が危篤状態になった際に新聞、テレビなどで騒ぐだけで皇位継承の話は出なかった。是は明治時代に決めた「皇室典範」が大化の改新以前の悪法に戻された結果だと、或る著書に書いてあった。その点では平清盛が後白河法皇や高倉天皇を無視して、一人では魚類も食べられない乳飲み児を強引に皇位に就けようとしたのは進歩的？な行為であったかも知れない。

その影響と言うか被害と言うか、二月二十一日には健康上も治世上も何の問題が無かった十九歳の高倉天皇が皇位を降ろされ、涎(よたれ)を垂らした言仁親王が第八十一代・安徳天皇として踐祚(せんそ)皇位継承したのである。是は入道相国こと平清盛が全てを自分の思うが侷にしようとした結果である。平家一門は完璧に天皇の外戚となった訳であるから大喜びをしていた。

形式的行事として「三種の神器」つまり、皇位の象徴とされる八咫鏡、神璽(しんじ)曲玉、宝剣(たぎら)の譲渡が行われ、公卿が内裏の宣陽殿に集まって古事を先例に行事を実施した。先ず天皇に近侍する女官・弁内侍(べんないじ)が剣を持って室外に出ると、それを近衛中将の藤原泰通が天皇に代わって受け取った。次に醍醐源氏の女官・備中内侍が神璽の箱を取り出して右近衛少将の藤原隆房に渡した。二人の女官は高倉天皇に仕える身であったから、宝剣や神璽を扱うのもこの日限りで有ろうと、晴れの儀式なのに心が重かった。その場では平家一族の少納言の内侍が此の役目であった。しかし、一度、神器に触れてしまうと次の天皇の時に同じ役には就けない……と聞いていたことを思い出して急に辞退をした。年齢も若くは無いのであるから、二度の役目は無い

のにと、回りの女官たちは其の態度を憎んだ。

其れに引きかえて備中内侍などは年齢が未だ十六歳であるのに希望して此の役を果たした。立派な心掛けである。(女官でも平氏系は憎まれていたらしい)此の様にして天皇が替わり、しかも乳幼児であったから宮中では暮らさない。そこで高倉天皇の御座に置かれていた申し送りの品々が安徳天皇の内裏と定められた五条大路の南、東洞門大路の西の御所に運び込まれたのである。此処は大納言・藤原邦綱の屋敷であったが邦綱の三女が安徳天皇の乳母に指定されたため、乳母の家が里内裏(天皇の居場所)に指定されたことになる。

一方で高倉天皇の里内裏であった閑院殿(二条大路の南、西大院大路の東)は、主が天皇から先代天皇に替わった影響で、急に景気が悪くなり、火影も淋しく時刻を知らせる役人の声も絶えて、警護に当たる武士の交代時に発する声も聞こえず其れまで勤務していた人々は心細くなった。新天皇の即位という目出度い行事なのに平家主導による変則的な強引な譲位であったから、密かに涙を流し心を痛めた人々も多かった筈である。

やがて慣例により左大臣が公の場に現れて「皇位が乳幼児に譲られた」と発表をした。心ある人々は高倉天皇の心中を察して(平清盛の所為で強引に譲位させられた事情を気の毒に思っ)同情をしたけれども文句は言えない。御自身の決断では無く、平清盛の圧力に依る譲位であることは誰もが知っていたから心ある国民は陰で「御気の毒に！」と言うしかない。新天皇は、何回数え直しても当然のことながら年齢が三歳にしかならないから平家一族以外の国民の誰もが「是は早すぎる譲位だな！」と言いつけていたのである。

其れに対して平家一門である清盛夫人・時子の弟(大納言)時忠は自分の妻が安徳天皇の乳母に指定されたから当然と言えば当然なのだが「今度の譲位を早すぎるなどと非難は出来ない。異国(中国)でも周の成王(紀元前一一〇〇年代)は三歳で即位し、晋の穆(ほく)帝(西暦三百年代)は二歳で帝位についた。日本でも近衛天皇が三歳、六条天皇が二歳で、いずれも襦袢の中(きょうほの中、オシメを当てた状態で、此の場合は幼児用の着衣)で帝位についた。自分では着物もキチンと着られ無いから、摂政が背負ったり、皇后が抱いたりして、周りの者が良く補佐をして政務を見られた。(…それが異常なことに気がつかない時忠が馬鹿なのだ)後漢の高上皇帝(和帝?)は生後百日で帝位に就かれた。幼い天子が即位された例は、この様に和漢両国に有る……と堂々と言いつつたので、是を聞いた故実・礼法に詳しい人たちは「平時忠が」何と恐ろしいことを言うものだ。そもそも、その様な例は本当に良い例であったのか？」と噂し合っていた。

安徳天皇の即位によつて平清盛夫妻は天皇の外祖父、外祖母となり「准三后(じゅんさんごう)太皇太后、皇太后、皇后に準ずる身分」の宣旨(せんじ)天皇の口頭命令、天皇は幼児であるから清盛が勝手に決めた?を受けて年官、年爵(皇族、貴族優遇の為の特別手当)を貰うことになった。宮中に出仕する当番の者をコキ使う資格も得たのである。清盛の屋敷には御祝の為に派手な衣装を身に着けた連中が入り込んで宮中か御所のような有り様であった。清盛は既に出家人道した身であるが、栄耀栄華は尽きないのであろうか、是までに出家した身で「准三后」を受けたのは法興院の大入道と呼ばれた藤原兼家(道長の父九九〇年)の例(兼家は辞退した)だけである。

治承四年三月上旬になると高倉上皇が安芸の宮島

（厳島神社）へ行幸される…という噂が広がり人々は不審に思った。天皇が退位されて諸社に詣でられると言えば、石清水八幡宮か賀茂神社、或いは奈良の春日神社など、京都近辺が例であるのに遠く安芸国まで行かれるのはなぜで有ろうかという疑問である。それに対して或る人が尤もらしく言うには「白河法皇は熊野へ行かれ後白河法皇は大津坂本の日吉神社に行かれた。是が先例ではなく御本人の希望であったことは知られている。高倉上皇が平家の崇拜する厳島神社に行かれるのは、表面上は平家に同心したように見えて、実は法皇の鳥羽殿幽閉が早く解かれるように、入道相国の謀反の心が静まりますように（平家が崇拜する）宮島に祈願される為で有ろう」と。

ところが、是を聞いた比叡山の馬鹿坊主たちが怒り出した。「石清水（八幡）、賀茂神社、春日神社へ行かなければ我ら比叡山の鎮守である山王権現に行幸されるべきであるのに、安芸国まで行くなど何時からそうなったのだ！そういうことならば我らは神輿（みこし）を担ぎ出しても、行幸を留め奉る！」と勝手に決めて大騒ぎを始めた。

此の為に高倉上皇の予定を延期し、清盛入道が延暦寺を宥めて、ようやくに事を収めたのである。

治承四年三月十七日、高倉上皇は厳島参詣の為に清盛入道の居る西八条邸に入られた。其の日の夕方に、上皇は前右大将の宗盛を呼んで「明日は安芸国へ行く前に鳥羽殿に寄って法皇にお目に掛かりたいと思うが、どうであろうか？是を清盛入道に知らせたほうが良いのであろうか？」と言われた。是を聞いた宗盛は、ハラハラと涙を流して「その様な御心配には及びません。（どうか、自由にさせてください）」と答えた。これは評判の良くない平宗盛にしては立派な答えである。宗盛は、その足で鳥羽殿に行き後

白河法皇に上皇の訪問予定を告げたから、法皇は「夢ではないか？」と喜ばれたのである。

三月十九日、高倉上皇付き公卿の責任者である権大納言兼中宮大夫・藤原高季が真夜中に来て起こし出発を告げた。この頃の宮廷人たちは先祖が盗賊であったのかどうか、真夜中に行動することに慣れていたようである。高倉上皇も何の抵抗も無く真夜中に西八条を出て厳島参詣に出発した。

季節は弥生（春）を半ば過ぎていたけれども夜が明けた後に残る月は朧（おぼろ）に霞んでいる。北国へ帰る雁が鳴きながら雲間を飛んで行くのも何となく哀れに聞こえる。未だ夜が明けないうちに上皇の乗った輿車は鳥羽殿に着いた。

上皇は門前で車を降り、中に入ったのだが警備の人数も稀で木立は暗く、もの淋しげな住まいに、先ず哀れを誘った。季節は既に春から初夏に替わっているのに夏木立の梢の花も色が衰えて、義務的に鳴いている鶯も後期高齢の声しか出さない。

思えば去年の正月六日に（当時の）高倉天皇が年頭の挨拶に法住寺殿（後白河法皇御所）を訪れた際には、出発から戻りまで音楽隊が演奏を続けていて警護を任務とする武士たちが列をなし、邪魔な公卿たちが幕を張り廻らせた中に袴（ひしめ）き合っていた。その中を宮内省所属の清掃係が庭に筵（むしろ）で道を作っていた。それなのに、今回は、上皇が法皇を訪ねるといつても何一つとして準備がされていない。「是は夢！」としか思えない違いである——平家物語には、その様に書いてあるが、天皇であっても現役と引退後では待遇が違うのは仕方が無い。抑留されている法皇を、退職した天皇が密かに訪問するのであるから音楽隊や行列は付かないと思う。

高倉上皇が来た事は、桜町中納言が後白河法皇に

報告したので、法皇は寢殿の正面・中央階段の奥にある部屋で待っていた。高倉上皇は明けて二十歳になったので天皇として在籍していたならば立派な姿で玉座に御出でになったことであろう。

早逝した生母の建春門院（清盛夫人・時子の妹）に似ていたので、法皇は先ず、亡き女院のことを思い出して涙を流された。二人が対面する席は近づけて設けられ紀伊の二位（法皇流被）で登場した法皇の乳母以外の者は同席を許されなかったので会話の内容は他の者には分からない。二人は長い時間をかけて、あれこれと話をされたようで、高倉上皇が鳥羽殿を退出されたのは日も暮れてからである。上皇は其の俣、鳥羽の船着場から用意された船に乗り厳島へ向かわれた。

高倉上皇は、後白河法皇の住まう鳥羽殿が寂しい屋敷なので、さぞ御不自由なことで有ろうと心を痛め、法皇は上皇の船旅と途中の仮御所がどうなのか心配でたまらなかつた。是までの例のように、皇室の祖先を祀る伊勢神宮や石清水八幡宮、或いは賀茂神社などに行かれるのであれば安心なのだが今回は、それらの神社を差し置いて（平清盛への配慮から）遙々と安芸国（宮島）まで行かれるのであるから、神様もきつと気の毒がつて（上皇の）願いを聞き届けて下さるであろうと、無事を祈るばかりであった。

〓 続く 〓

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

